

鷹狩図の流行をめぐる一考察

水野裕史（熊本大学）

古来より日本では鷹狩の絵画が描かれてきた。建長 6 年（1254）の『古今著聞集』には内裏清涼殿の衝立屏風に描かれたと記されており、《春日権現験記絵》などの中世絵巻からその様相を窺い知ることができる。そして近世初期には、数多くの鷹狩図が制作され、画題として流行したのである。先行研究では、鷹狩図が流行した背景として武家の鷹狩への愛好を根拠とする見解が展覧会図録などで簡略に報告されている。しかし現存する鷹狩図には、武家ではなく公家のみを描いた作例があり、武家の鷹狩の愛好と鷹狩図の流行を安易に結びつけることには疑問が残る。そのため鷹狩図の成立背景には鷹狩の愛好だけではない可能性を考慮する必要があるだろう。

そのような中、発表者が注目するのが、中世末期に制作され「野行幸絵」と呼ばれた絵巻である。「野行幸」とは、鷹狩のために天皇が大原野・北野・嵯峨野などの京都近郊の野に行幸することであり、古代において盛んに行われた行事である。中世末期の『基成朝臣鷹狩記』（宮内庁書陵部蔵）の奥書には「五巻は代々御門の野の行幸の絵なり」とあり、中世末期には「野行幸絵」と呼称される絵巻が存在したことが明らかである。

本発表では、まず現存する近世後期の野行幸絵について紹介するとともに、近世初期の鷹狩図を比較材料としながら、中世末期の野行幸絵について復元を試みる。その上で、鷹狩図の様式成立には野行幸絵が関わっていることを指摘する。また、鷹狩図の成立には、鷹狩の場面が描かれている源氏絵や曾我物語図などの影響を鑑み、鷹狩を主題とする絵画作品の様式成立について、様々な絵画作品の比較を通じて論じることとする。

加えて、近世初期において鷹狩図が制作された文化史的背景についても検討する。中世末期から近世初期は、中澤克昭氏によれば西園寺家や持明院家などの「鷹の家」と呼ばれる鷹狩の故実家が確立した時代とされ、また「鷹書」と呼称される故実書が多く書かれた時代でもある。つまり鷹狩図が流行した近世初期には、鷹狩をめぐる環境が隆盛しており、これを背景に鷹狩図が流行したものと見なすことができるのである。

さらには下原美保氏らによって指摘されている近世初期における王朝文化の復古運動と絵画の関係も見逃せない問題である。近世初期には多数の王朝絵巻が制作されたことで知られ、野行幸絵や鷹狩図はこの復古運動の影響を受け、制作された蓋然性が高い。

本発表では、鷹狩図の流行の背景には、鷹狩の愛好だけではない「鷹の家」の成立や「鷹書」の流行、王朝文化の復古運動など、様々な文化史的環境が関わっていることを提起する。